

連歌展

貴族から武士、
そして民衆へ



東海大学付属図書館第63回展示会

東海大学 湘南校舎 付属図書館展示室(11号館1階)

2017年6月19日(月)~7月31日(月)

～ 最近の展示 ～

- 2011年 11月 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展
- 2012年 5月 國文學の傳燈 写す・読む・伝える－桃園文庫の世界－
- 2013年 6月 語り継がれる書物たち
- 2014年 7月 科学と技術の古典
 - 11月 書物に棲む動物たち
- 2015年 5月 幕末・明治を生きた人々
 - 12月 桃園文庫展－池田亀鑑の仕事－
- 2016年 5月 東海大学付属図書館 特別図書展
 - 11月 武士(モノノフ)展

表紙の宗祇の絵は展示番号44より

展示にあたって

連歌は和歌から起きました。元は貴族の教養だった和歌ですが、鎌倉時代頃に、人々が集まって歌を詠みあうという形に変化してきました。それが連歌です。連歌が「座の文芸」と言われる由縁です。そして室町時代の応仁の乱前後に飛躍的な発展を遂げていきます。

連歌は貴族だけでなく、武将や民衆へと広がりました。現代の私たちが面白がって遊ぶゲームと同じように、昔の人も集い、ルールを決めて歌を詠み、楽しみ、競い合つたのです。

連歌が盛んになる室町時代から戦国時代では、連歌の専門家、連歌師が多く出てきました。その中で、今回は代表的な心敬や宗祇に関係する資料を中心に展示しました。昔の人の連歌を楽しむ様子を想像しながらご覧になってください。

最後になりましたが、今回展示を開催するにあたって本学文学部日本文学科 鍛治光雄教授にご協力、ご教示いただきました。貴重な資料も多数ご出品いただきました。ここに感謝し、厚く御礼申上げます。



雪ながら山本かすむタベかな
宗祇
行く水とほく梅にほふきと
宵柏
川風に一むら柳春見えて
宗長

連歌関係年表

1 宗祇執筆次第(そうぎしゆひつしだい)

刊本 1冊 京都：黒川又左衛門, 明暦3年(1657)刊 伝宗祇著

連歌作法書。室町時代の代表的連歌師の宗祇が書いたとされるが、仮託書と思われる。長享2年(1488)成立。後に明暦3年(1657)『仮名仕近道之事』に収録された。連歌の作法、また連歌会における様々な作法を多岐に渡って記した、実用的な書物である。

2 連歌新式追加并新式今案等 (れんがしんしきついかならびにしんしきこんあんとう)

刊本 1冊

連歌を詠む際に守るべき法式、作法の書。享徳元年(1452)に一条兼良が宗砌の意見を聞いて『新式今案』が作成されたが、さらに文亀元年(1501)に宗祇の弟子、肖柏が改訂をほどこしたもの。その後長く連歌の規範とされた。

3 水無瀬三吟百韻(みなせさんぎんひやくいん)

写 1軸 元禄元年 (1688) 宗祇・肖柏・宗長詠

連歌百韻。宗祇と、その高弟である肖柏・宗長が長享2年(1488)後鳥羽院の御廟法楽として水無瀬神宮に奉納したもの。賦物は「何人」。洗練された格調高い作品であり、古来最も優れた連歌として重んじられてきた。発句は「雪ながら山本かすむゆふべ哉」(宗祇)。

4 七十一番職人歌合(しちじゅういちばんしょくにんうたあわせ)

写 3軸 江戸後期写

明応9年(1500)頃成立。中世後期最大の職人を題材とした職人歌合。作者は複数の上層公卿歌人によるものとされている。原画の筆者は土佐光信。歌合(うたあわせ)とは、左右に分かれて和歌を一首ずつ詠い、判者が批評して勝負を判定するというものである。この資料は、歌人自らを職人に仮託し、鍛冶職人や傘張・絵師・仏師など142の職種の職人を左右に分け、それぞれ月と恋を題材として二題の和歌を詠ませ、71番の歌合としたもの。連歌師は第66番目に登場する。絵には連歌師と執筆(連歌会で句を書き留めたり進行をする役)が描かれている。連歌師は僧の姿をしている。執筆は右手に筆を持ち文台の上の懐紙に句を書き留めようとしている。文台の脇の硯箱の中には硯、筆、墨が置かれている。当時の連歌会の様子をうかがい知ることができる。

5 古事記(こじき)

複製 3巻3冊 (原本は尊敬閣文庫蔵) 育徳財団 昭和12年(1937)刊 太安万侖撰

奈良時代の歴史書。天武朝に企画され、天武天皇の命で稗田阿礼が習い覚えた帝紀と旧辞を、元明天皇の命を受けた太安万侖が撰録したもの。和銅5年(712)成立。中巻に日本武尊(やまとたけるのみこと)(五・七・七)と火焼翁(五・七・七)の唱和があり、連歌の最初とされる。万葉集の大伴家持と尼との唱和を最初とする説もある。

6 万葉集(まんようしゅう)

刊本 20巻20冊 洛陽：安田十兵衛, 寛永20年(1643)刊 仙覺校；成俊点

現存最古の和歌集。大伴家持が現存の形にまとめたとされる。成立は奈良時代の末頃。所収歌の歌体は短歌が大部分で、長歌、旋頭歌(せどうか)、仏足石歌、連歌を含み、歌数は約4500首。他に漢詩文が数編ある。歌の内容による分類は巻によって違うが、雑歌(ぞうか)、相聞(そうもん)、挽歌の三分類を基調とする。作者層は、天皇、皇族、貴族、官人、防人、乞食者などと広く、東国民謡ともいわれる東歌などもある。代表的歌人は、額田王、柿本人麻呂、高市黒人、山部赤人、山上憶良、高橋虫麻呂、大伴旅人、大伴家持など。なお、巻八に尼と大伴家持の唱和があり、現存最古の連歌資料とされている。

7 拾遺和歌集(しゅういわかしゅう) 写本 20巻3冊 江戸時代後期写

平安中期の第三番目の勅撰和歌集。撰者、成立ともに未詳。花山法皇を中心に寛弘三年(1006前後)に成立したとみられる。藤原公任の私撰集「拾遺和歌抄」との関連が深い。四季、賀、別、物名、雜、神楽歌、恋、雜四季、雜賀、雜恋、哀傷に部立され、1351首(定家本系統本)の歌を収める。万葉歌や紀貫之、大中臣能宣、清原元輔の歌などが多い。

8 八代集抄(はちだいしゅうしょう) 注釈書 108巻50冊 天和2年(1682)刊 北村季吟著

『古今和歌集』から『新古今和歌集』まで、平安前期から鎌倉初期に至る八代の勅撰和歌集の総称を八代集というが、その内の金葉和歌集は第五番目に成立したもの。天治元年(1124)白河上皇の命により成立(初度本)。撰者は源俊頼。二度の改修を経て大治2年(1127)成立(三奏本)。勅撰和歌集の5番目。源俊頼、源經信、藤原頤季ら227人の歌約650首を収録。客観的、写生的描写が多く、新奇な傾向も目立つ。なお、巻十雜下に「連歌」の部が特設されて、短連歌19首が収められている点が連歌史を考える上で注目される。

9 菴玖波集 卷十四巻(つくばしゅう) 写 1軸 南北朝期頃写 二条良基編

わが国最初の連歌准勅撰集。書名は、連歌の起源とされる記紀(古事記と日本書紀)の日本武尊が筑波を過ぎて甲斐に着いた時、火焼翁と交わした「新治(にいはり)筑波を過ぎて…」の問答歌にちなむ。二条良基、救濟(ぐさい)共撰。文和5年(1356)成立、翌延文2年(1357)勅撰集に准ぜられる。古来の連歌二千余句を収集しており、連歌の変遷史を知ることができる。なお、この作品により、連歌は和歌と同等の地位となる。菴玖波集成立後間もない頃の写本で卷十四(雜連歌三)1巻。もとは冊子体であったものを巻子に改装したもの。性遵法師の付句から20句が欠落している。

10 菴玖波集(つくばしゅう) 写本 20巻2冊 江戸初期頃志賀自軒写 二条良基編

卷十九「雜体連歌」に「俳諧」の部がある。

七賢時代

七賢とは室町時代後期に活躍した連歌師宗祇(そうぎ)が連歌の名匠として選んだ七人。宗砌(そうぜい)・賢盛(宗伊)・心敬・行助(ぎょうじよ)・専順・智蘊(ちうん)・能阿のこと。

11 宗砌田舎への文(そうぜいいなかへのふみ) 写 1軸 慶長6年(1601)写 宗砌著

連歌論書。「宗砌田舎への状」の派生本か。「宗砌田舎への状」は「宗砌返札」ともいう。文安6年(1449)以降の成立。宗砌が「田舎」の人の質問に答えた書。らん留、切字、重ね詞などについて説いている。「天正十九年古写本 紹巴及玄仍自筆奥書あり」と箱にある。巻末に「老醉人書之」とあり、さらに続けて「玄仍」(紹巴の長男。里村北家の祖)の奥書あり。

12 連歌発句集(れんがほつくしゅう) 写本 1冊 室町末期頃写 宗砌 ほか著

連歌七賢である宗砌・智蘊・能阿・行助・専順・心敬等の発句を、四季の題材で配列したもの。元日、立春、梅、花、納涼、夕立、名月、秋雨、霜、氷など題材は様々である。

13 河瀬方十花千句(かわせがたじっかせんく)

写本 1冊 江戸初期 不蹟法師写 専順 ほか詠

「表佐千句（おさせんく）」「後美濃千句」ともいう。文明8年（1476）3月6日から8日まで、美濃国（現岐阜県）阿弥陀寺で行なわれた千句。応仁の乱を避け、美濃の斎藤妙椿を頼って下向した専順を、宗祇が訪ね興行されたもの。十の百韻で構成されているが、それぞれの発句はいずれも花を詠むので「十花千句」と称されている。連衆は、専順・宗祇・甚昭・紹永・俊重・清玉・氏忠・正玄・承世等。

14 会席廿五禁(かいせきにじゅうごきん)

写本 1冊 天和2年(1682)写 宗祇著

連歌作法書。延徳元年（1489）成立。連歌会席で禁ずべき行為を二十五ヶ条の箇条書きで示したもの。難句、禁句、声高に雑談すること、あくび・居眠り、大酒大食などがあり、当時の連歌会の実態がうかがえる。後に各項目に注が付けられたものや、他論と合冊された写本が多く作られて広く流布した。また、多くの連歌論書・俳論書に引用された。この資料は「連句心得いは五百ヶ条」と「会席廿五禁」の合冊である。

15 竹林抄之注(ちくりんしょうのちゅう)

写本 2冊 室町後期頃写 宗祇編

「竹林抄」は文明8年（1476）成立の連歌撰集。宗祇が宗砌（そうせい）、賢盛（宗伊）、心敬、行助（ぎょうじょ）、専順、智蘊（ちうん）、能阿の同時代の先輩連歌師七人の作品から選んだ連歌撰集。春夏秋冬恋旅雜、発句に部類している。書名は中国晋代の頃、俗世間を避けて竹林に集まり、清談を行った七人の隠士にちなんだ竹林七賢の故事による。永享元年（1429）から「竹林抄」成立の文明8年（1476）の間の宗祇が模範とした時代を彼ら七人にちなみ「七賢時代」などとも呼ばれている。「竹林抄之注」は「竹林抄」の注釈書。「竹林抄」の注釈書は多く書かれているが、この資料は内題の下に「宗祇」とあり、宗祇自らの注とされている。

賦物(ふしもの)

賦物とは句に詠み込むべき語や文字の条件を設定し、句の詠作の共通としたもの。様々な条件があつた。「何人」とあるのは、「口人」の口の中に語を入れて熟語を作り、口の語を句中に読み込むというものである。例えば「水無瀬三吟百韻」の賦物は「何人」である。発句「雪ながら山もとかすむタベ哉」では「山人」の「山」が詠み込まれている。賦物は14世紀末頃になると、発句のみとなつた。

16 賦山何連歌：元和元年霜月廿二日(ふやまなにれんが：げんなんがんねんしもつきにじゅうににち)

写(懐紙) 1巻(4枚) 元和元年(1615)写 法橋昌琢 ほか詠

賦物を「山何」とする百韻連歌。元和元年(1615)11月22日に行われた。金泥下絵入料紙。発句は「よしやみよ雪の上なる今朝の月」(昌琢)。連衆は、法橋昌琢・禪高・貝・法印禪昌・法印応昌・昌倪・慶純・玄陳・紹由・了俱・玄的・時佐。「法橋昌琢」は里村昌琢のこと、里村昌咤を父とし、母は紹巴の娘である。里村南家初代。紹巴没後の慶長頃(1596-1615)から連歌界の第一人者となった。

17 賦何木連歌：元和八年五月十四日(ふなにきれんが：げんなはちねんごがつじゅうよつか)

写(懐紙) 1巻(4枚) 元和8年(1622)写 国丸、友継 ほか詠

賦物を「何木」とする百韻連歌。元和8年(1622)5月14日に行われた。懐紙。原装四折。発句は「蟬の声冬をいつはる時雨哉」(国丸)。連衆は、国丸・友継・久園・円政・清安・化教・守好・春重。

18 賦何路連歌：天文廿三年正月卅日(ふなにみれんが：てんぶんにじゅうさんねんじょうがつさんじゅうにち)

写 1軸 天文23年(1554)写 伊長 ほか詠

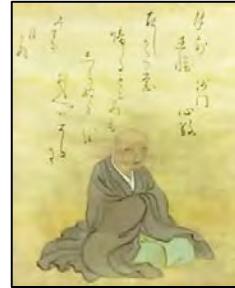
賦物を「何路」とする百韻連歌。天文23年(1554)1月30日に行われた。懐紙を巻子仕立てにしたもの。発句は「はるや先入峰ならし朝霞」(伊長)。連衆は、伊長・玄良・常真ほか計16名。

19 賦何人連歌：元亀元年六月十一日(ふなにひとれんが：げんきがんねんろくがつじゅういちにち)
写 1軸 元亀元年(1570)写 紹喜 ほか詠

賦物を「何人」とする百韻連歌。元亀元年(1570)6月11日に行われた。里村昌叱による筆と伝えられている。発句は「来ぬ秋を松風すゞし夕月夜」(紹喜)。連衆は、紹喜・禪興・紹巴・佳・昌叱・永甫・聖碩・慶典・慶忠・禪永・禪正・宗菅・能重・藏円・松千代。里村昌叱と後見人である紹巴が同席している。この資料は懐紙を巻子仕立てにしたものである。

心敬(しんけい:1406-1475)

応永13年-文明7年(1406-75)室町中期の連歌師、歌人。正徹(しようてつ)に師事して和歌を学ぶ。室町中期の連歌作者として代表的な存在。応仁の乱の騒乱を避けて京から海路で関東へ下向する。文明元年(1469)の夏には伊豆・駿河に旅し、翌年の文明2年正月には、太田道真(太田道灌の父)主催の「河越千句」に宗祇などと参加。次代の宗祇、兼載らに大きな影響を与えた。相模国大山山麓の石藏(現伊勢原市)の淨業寺に隠棲していたが、そこで没。70歳。



(展示資料55より)心敬

20 さゝめごと(ささめごと)

刊本 2巻2冊 元禄3年(1690)刊 心敬著

心敬の代表的連歌論書。草案本系。寛正4年(1463)郷国紀伊国名草郡の八王子社に参籠中、土地の連歌の好士の求めに応じて筆を執ったもので、和歌と連歌を同一視して、『新古今和歌集』や和歌の師正徹の歌風を連歌の理想としている。宗祇たち連歌師に直接大きな影響を与えたばかりでなく、芭蕉の門人たちへの教えにも共通する考えが見られる。

21 芝草自注(しばくさじちゅう)

写本 1冊 心敬自注

心敬自らの句集『芝草』に注釈を加えたもの。「芝草」は心敬自編の連歌・和歌の全作品集である。

22 愚句芝草内發句(ぐくしばくさないほっく)

写本 1冊 室町後期写 心敬著

心敬の句集『芝草』内の発句を集めたもの。前半は応仁元年(1467)、関東下向前の句を整理したものであり、後半はそれ以後の関東下向後の句を集めている。

23 指合并執筆作法(さしあいならびにしゅひつさほう)

写本 1冊 大永5年(1525)写 心敬著

指合とは連歌の式目(ルール)に触れてさしきわりが生ずることを指合という。執筆(しゅひつ)は会で詠まれた句を懐紙に書きとめる役割であるが、一順末尾に一句詠むことが多い。

24 老のくりごと(おいのくりごと)

複製 2冊 (原本は神宮文庫蔵) 日本古典文学会 昭和51年(1976)刊 心敬著

心敬の連歌論書。文明3年(1471)頃成立。心敬が関東下向中、相模国大山山麓の石藏(現伊勢原市)の淨業寺に隠棲していたころに住職の和尚に書き与えたもの。内容は応仁の乱による関東下向から大山の山中に身を寄せるにいたった経緯も含めた連歌論書。本資料は神宮文庫所蔵のものを日本古典文学会が出版したものである。『苦躉』として上巻に「老のくりごと」下巻に「ささめごと」が収められている。

太田道灌(おおたどうかん:1432-1486)

太田道灌(俗名資長、持資)は、江戸城を作ったということでも名高いが、若い頃は、武勇ばかりにふけっていたという。鷹狩りの際ににわか雨に遭い、近くの農家で蓑の借用を願ったところ、その家の少女が山吹の花を黙って差し出した。怪訝に思った道灌だったが、その行為が古歌の「七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞ悲しき」から来ているということを家臣から教えられた。この歌の意味が分からなく、後に歌の道に入るきっかけとなったという話は有名である。ただ、道灌は幼い頃から文武両道に優れていて和歌に関しての知識がなかったとは思えないという説もある。

道灌の父、道真(俗名資清)は文芸にも造詣が深かった。その影響もあり道灌も和歌や連歌をたしなんだ。道真は京都から応仁の乱を逃れてきた連歌師心敬を招き、連歌会を多くした。また、子どもである道灌も連歌の会をよくおこなった。「武州江戸歌合」は太田道灌が文明6年(1474)に江戸城に心敬らを招いた歌合。判者は心敬、講師は平盛、これに道灌らが加わった。道灌は江戸城に心敬を何度も招いて歌の会を催したと伝えられている。道灌は大山(伊勢原市)の地に長尾市原によって暗殺された。伊勢原市上粕屋洞昌院に墓があり、傍らに心敬の句碑がある。



道灌の墓(洞昌院 伊勢原市)



心敬句碑(洞昌院 伊勢原市)

『新撰堺久波集』では「雲はなほ」となっている

「雲もなほ
さだめある世の
しぐれ哉」

25 河越千句(かわごえせんぐ)

複写 1冊 (原本は東北大学附属図書館蔵)

太田道灌の父である太田資清(道真)が文明元年(1469)1月に心敬、宗祇、兼載らを河越城(現在の川越市)に招いておこなった千句の連歌会。

26 心敬僧都庭訓(しんけいそうずていきん)

写本 1冊 天正2年(1574)写 兼載著

兼載は室町後期の連歌師、歌人。会津の人。和歌を堯恵に学んで古今伝授を受け、連歌は心敬に学んだ。兼載が若年の頃に、師心敬から受けた連歌の心構えに関する教えを筆録したもの。初心の気持ちから具体的に作句の心のありかたを説いたもの。

27 若草記(わかくさき)

写本 1冊 慶長4年(1599)玄仍写 兼載著

兼載の連歌論書。初心者向けの15の項目に答えた問答形式の書である。「若草山」ともいう。玄仍は、里村紹巴の長男。天正12年(1584)頃から紹巴一門に加わり、慶長7年(1602)父から古今伝授をうけた。

28 園塵(そののちり)

写本 1冊 元亀元年(1570)写 兼載著

兼載の句集。兼載の生涯の連歌作品が年代順に収められている。全4巻。長享2年(1488)頃から永正7年(1510)頃の成立とされる。

宗祇(そうぎ:1421-1502)

室町時代後期に活躍した代表的な連歌師。宗砌、専順、心敬に連歌を学び、東常縁(とうのつねより)より古今伝授を受けた。応仁の乱以後、地方豪族、特に国人領主層に京都文化への関心と連歌の大流行がみられた。全国的な連歌の大流行とともに、宗祇やその一門の活躍もあり、連歌の黄金時代を迎えた。越後(新潟県)から駿河(静岡県)へ向かう途中の箱根湯本で没した。82歳。



(展示資料44より)宗祇

29 宗祇法師家集(そうぎほうしかしゅう)

写本 1冊 江戸中期 宗祇著

詠草(えいそう)ともいう。宗祇の歌集。

30 祇公発[句]集(ぎこうほっくしゅう)

写本 1冊 江戸後期写 宗祇詠

書名は原資料「祇公発集」となっている。今[句]を補う。展示資料31の『自然斎発句』と同様宗祇の発句集であるが、内容に異同がある。本書は「七人連歌合」、「水無瀬三吟」等が収められている。表紙に「文政十三年寅八月 春椎之本」とあり。

31 自然斎発句(じねんさいほっく)

写本 1冊 室町末期写 宗祇詠；肖柏編

「自然斎」は宗祇の別号。発句のみを鑑賞の対象としたもので、宗祇の没後に肖柏によって編まれた。春の「立春」を始とし、冬の「雑冬」まで、発句約1600句を項目別に分類したもの。

32 宗祇名所独吟百韻(そうぎめいしょどくぎんひやくいん)

写本 1冊 天文10年(1541)写 宗祇詠

名所百韻とは、全句に名所を詠み入れた百韻で『浅茅』(宗祇著)にも名所の詠み様を示すなど、宗祇が名所に深く関心を持っていたことがうかがえる。この名所百韻の賦詠(ふえい)は文正2年(1467)正月1日。前年宗祇は初めて東国へ下向している。発句は「富士のねも年は越ける震哉」。

33 湯山三吟百韻(ゆやまさんぎんひやくいん)

写本 1冊 慶安3年(1650)写 宗祇、肖柏、宗長詠

延徳3年(1491)10月20日、宗祇とその高弟の肖柏、宗長を連衆として摂津国湯山(兵庫県有馬温泉)で張行された『賦何人連歌』の通称。正しくは『湯山三吟何人百韻』といふ。『水無瀬三吟百韻』とならんで宗祇一座の連歌の圧巻であるばかりでなく、作家として充実期を迎えた宗長の作風も特徴で、完成期連歌を代表する作品のひとつとして評価が高い。発句は「うす雪に木の葉色こき山路哉」(肖柏)。本書は湯山三吟の注入で、「古連歌集」に収められている。

34 湯山三吟百韻(ゆやまさんぎんひやくいん)

複製 1軸 (原本は柿衛文庫蔵) 日本古典文学会 昭和48年(1973)刊 宗祇、肖柏、宗長詠

『湯山三吟』の復刻版。

35 宗祇独吟千句(そうぎどくぎんせんく)

写本 1冊 天文8年(1539)写 宗祇詠 藤原通直筆

文明3年(1471)宗祇が伊豆国三島にて東常縁から初度の古今伝授の折、常縁の子竹一丸風邪祈祷立願報賽のため、三島明神に奉納したもの。『三島千句』とも称されている。「なべて世の風をおさめよ神の春」の第一百韻発句には古河公方来襲の情報を得ての戦勝祈願が込められているという。なお、第一百韻の発句「なべて世の風を治よ神の春」の句碑が宗祇の墓所のある定輪寺(静岡市裾野市)境内にある。

36 老葉集(わくらばしゅう)

写本 1冊 江戸初期写 宗祇著

宗祇第二の連歌自撰句集。大別して初編・再編本がある。初編本の成立は文明13年(1481)夏ごろと推定されている。再編本は文明17年(1485)8月には成立していた。本書は再編本系である。宗祇の代表的句集。本書は他に『糸教十首』・『賦何人連歌』などを収めている。

37 愚句老葉 10巻 (ぐくわくらば)

刊本 1冊 宝永元年(1704)刊 宗祇著；宗祇、宗長注

宗祇61歳、第二の自撰連歌集。初編・再編・注釈の三種があり、『愚句老葉』は、弟子の大内政弘にもとめられ自注したもの。宗長注とを合わせて宝永元年(1704)に霜梅堂が板行した2冊本があり、展示資料は後者。

38 下草(したくさ)

写本 1冊 江戸初期頃写 宗祇著

宗祇自撰の第三の句集で明応2-5年(1493-1496)頃成立。

39 角田河廿六ヶ條(すみだがわにじゅうろっかじょう)

写本 1冊 永禄8年(1565)写 宗祇著

連歌論書。「吾妻問答」ともいう。二条良基の「筑波問答」の形式に倣って関東での作ゆえの命名。二十六ヶ条の問答からなる。

40 新撰菟玖波集(しんせんつくばしゅう)

写本 20巻5冊 元和寛永頃写、伝鳥丸光広筆 宗祇撰

宗祇が中心となって連歌師兼載、公家方の三条西実隆・一条冬良らと編集した連歌准勅撰集。明応4年(1495)9月26日奏覽。宗祇の理想とした「有心、幽玄、長高し」の美意識のもとに厳しい選句がなされ、当時の正風連歌の模範と典型を示した。『菟玖波集』には俳諧連歌を収めているが、本書では排除している。

41 新撰菟玖波集(しんせんつくばしゅう)

写本 20巻5冊 江戸初期写 宗祇撰

42 宗祇筑紫紀行(そうぎつくしきこう)

刊本 1冊 天和3年(1683)和泉屋兵左衛門刊 宗祇著

「筑紫道記」(つくしみちのき)とも。文明12年(1480)、60歳の宗祇は大内政弘の招きにより山口へ赴き、同地に滞在して連歌指導などをしていた。そこから北九州への旅にのぼり、歴遊、連歌会などをを行い博多を経て山口に戻ってきた。その時の36日間の旅行記。

43 宗祇終焉記(そうぎしゅうえんき)

複写 1冊 (原本は箱根町立郷土資料館蔵) 宗長著

明応9年(1500)80歳で最後の越後下向の旅に出、門人宗碩のために『古今和歌集』の講義をし(『十口抄』)、越後を終世の地としていたが、門人宗長を伴って駿河へ向かう途中、文亀2年(1502)7月30日箱根湯本の旅宿に没した。82歳。遺骸は足柄山を越え、裾野市(静岡県)の定輪寺に埋葬されたことを宗長が記したもの。

44 絹本着色宗祇坐像(けんぽんちゃくしょくそうぎざぞう)

江戸中期1軸

坐像右肩に、里村昌陸・昌純の讚「宗祇老人肖像 うつしおくわがかけながらのうきをしらぬおきなぞうらやまれぬる」、宗祇の句「世にふるもさらに時雨のやどり哉、としのわたりはゆく人もなし、老のなみいくかへりせばはてならむ」あり。



「世にふるハ
更に時雨の
宿りかな」

宗祇句碑(神奈川県足柄下郡箱根町湯本)

『新撰菟玖波集』では「世にふるも」となっている

45 宗祇追善千句(そうぎついぜんせんく)

写本 1冊 元禄3年(1690)写 聰雪 ほか詠

巻頭に「永正十五年八月十日 於京都東山丸山之道場 宗長興行 千句」とあり、宗祇が没したのが文亀2年(1502)なので、十七回忌に興行せられたものと考えられる。死後もなお、門下の連歌師達から敬愛されていたことが伺える。連衆は聰雪(三条西実隆)、肖柏、宗長、通能、玄清、宗碩、覚阿、寿圭など。

46 伊庭千句(いばせんく)

写本 1冊 大永8年(1528)写 聰雪 ほか詠

大永4年(1524)3月17日から21日にかけて、伊庭貞和を願主として宗碩の庵室月村斎で興行された、聰雪(三条西実隆)、宗長、宗碩の三吟。

47 連歌雨夜記(れんがあまよのき)

刊本 1冊 元禄10年(1697)刊 宗長判

宗祇の弟子の宗長は禪の宗教的教養のほかに古典・連歌・俳諧にも優れた中世後期の代表的な連歌師で、宗祇の最後の旅にも同行した。本書は宗祇の庭訓をもとにし、その校閲加筆を得たもので、風体・てにをは付などの付合の種々相を作例・例句をひいて解説したもの。

48 連歌押善集(れんがたくせんしゅう)

写本 1冊 文化13年(1816)刊 宗牧編

連歌、発句を詠む際の一般的注意を記した連歌師宗牧(宗祇の弟子)の連歌論書。天文21年(1552)に成立。四季の景物を12か月に配し、さらに各季ごとに雑題を補っている。和歌の題詠、百首歌の盛行を背景に、連歌文芸における本意論を踏まえた発句・季題意識を進め、後世の俳諧の発句・季意意識に大きな影響をあたえた。

49 賦何衣百韻(ふなにころもひやくいん)

写本 1冊 江戸後期写

「何衣」を賦物とする百韻連歌。「高野參詣百韻」ともいう。文禄3年(1594)3月4日に高野山青巖寺で開かれた連歌会で、主催は太閤豊臣秀吉。一座したのは里村紹巴、秀吉、家康、前田利家、伊達政宗、玄旨(細川幽斎)などの秀吉政権最盛期の豪華な面々である。一字名「松」とあるのが秀吉。

50 賦何船連歌(ふなにふねれんが)

写本 1軸 天正7年(1579)写 昌叱 ほか詠

「何船」を賦物とする百韻連歌。鎌倉時代初期の公家で歌人の藤原定家筆の色紙(「来ぬ人をまつほの浦の夕凪に焼くや藻塩の身も焦がれつつ」)を細川藤孝(幽斎)が得たことを祝うために里村紹巴宅で開かれた連歌会。細川藤孝は、戦国時代から江戸時代初期にかけての武将。足利義晴、義輝、義昭に仕え、義昭追放後は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた。連衆は、里村昌叱、細川藤孝、紹巴、心前。

51 愛宕百韻(あたごひやくいん)

複写 1冊 (原本は京都大学附属図書館所蔵「集連」) 明智光秀 ほか詠

天正10年(1582)、本能寺の変の直前に、明智光秀が京都愛宕山の威徳院で興行した連歌。発句は「時は今あめが下なる五月哉」(明智光秀)。「天が下しる」とする伝本が多く、その場合は光秀が信長への謀反の決意を示したものともいわれ有名である。連衆は光秀、行祐、紹巴、宥源、昌叱、心前など。

52 連歌秘伝書(れんがひでんしょ)

写本 1冊 室町後期頃写 里村紹巴著

外題は「連歌秘伝書」であるが、内容は『連歌至宝抄』である。里村紹巴の連歌学書。天正14年(1586)成立。関白に就任した豊臣秀吉に贈った書。内容は三つの部分に分かれ、はじめに連歌に対する心得を、本意説を中心に説く。次に発句・切字・脇・てにはなどにつき解説し、最後に連歌に用いる語彙を四季・多義語・恋・雑に分類して一覧にしている。紹巴の連歌論として最も整った形を備えており、流布した。多くの写本が伝存する上に、江戸時代初期に古活字版として、慶長頃および元和・寛永ごろに刊行されている。そのあとも何度も刊行されており、俳諧にも影響を及ぼしている。

53 新撰犬筑波集(しんせんいぬつくばしゅう)

刊本 1冊 慶長頃刊 宗鑑編

俳諧撰集。宗鑑によって編集された『詐諧連歌抄』が後に、連歌の『新撰菟筑波集』に対応して名付けられたもの。「犬」とは連歌に対する俳諧としての卑称の意をこめる。作者名は記されていないが、宗祇の作と認められる句がある。

54 おくの細道(おくのほそみち)

刊本 3冊 文政5年(1822)刊 松尾芭蕉著:香雪、交山画

松尾芭蕉の俳諧紀行文。元祿2年3月27日、門弟の曾良を伴って江戸深川を出発して、奥州、北陸の名所旧跡を巡り、同年9月6日伊勢に向かうため大垣に到着するまでの紀行。旅の主たる動機は「耳にふれていまだ目に見ぬ」名所を巡り、能因・西行・宗祇などの先人の跡をみることであった。

55 連歌師俳諧師肖像(れんがしひかいししょうぞう)

写(肖像画) 22枚 江戸後期

連歌師・俳諧師44人の肖像画。絹の布地に彩色で描かれ、2枚1組で台紙に貼られている。前半の21人は酒井抱一画「集外三十六歌仙」を模写したもの。連歌師では、宗祇・心敬のほかに、宗長・兼載・心前など様々な連歌師が描かれている。歌人として名高い正徹、東常縁や武将太田持資(道灌)、戦国大名の三好長慶・細川玄旨(幽斎)も他の連歌師と同じように連歌師のひとりとして紹介されている。

文学部日本文学科 錛治光雄教授提供資料

展示資料番号:25,34,43,49,51

参考資料

- 『俳文学大辞典』尾形彷[ほか]編 角川書店 1995.10
- 『俳諧大辞典』伊地知鉄男[ほか]編 明治書院 1980
- Japan Knowledge Lib <http://japanknowledge.com/library/>
 - ・国史大辞典(オンラインデータベース)
 - ・世界大百科事典(オンラインデータベース)
 - ・日本大百科全書(オンラインデータベース)
 - ・日本国語大辞典(オンラインデータベース)
 - ・日本人名大辞典(オンラインデータベース)
 - ・日本歴史地名大系(オンラインデータベース)
 - ・デジタル大字泉(オンラインデータベース)
- 『宗祇の生活と作品』金子金治郎著 桜楓社, 1983.2
- 『旅の詩人宗祇と箱根：宗祇終焉記注釈』金子金治郎著
(かなしんブックス 22) 神奈川新聞社 1993
- 『心敬の生活と作品』金子金治郎著 桜楓社, 1982.1
- 『七十一番職人歌合；新撰狂歌集；古今夷曲集』岩崎佳枝[ほか]校注
(新日本古典文学大系 61) 岩波書店 1993
- 『竹林抄古註』(貴重古典籍叢刊 2) 角川書店 1969
- 『竹林抄』[飯尾宗祇編] 島津忠夫 [ほか] 校注 岩波書店 1991.11
- 『さゝめこと』心敬著 宮内庁書陵部 1959
- 『連歌論集』3 木藤才蔵校注(中世の文学 12) 三弥井書店 1985.7
- 『心敬集 論集』吉昌社 1946
- 『群書類從』訂正 3 版 第 13 輯 塙保己一編 続群書類從完成会 1960.1
- 『常山紀談』[湯浅常山原著]；菊池真一編(和泉書院索引叢書 29) 和泉書院 1992.3
- 『戦国武将逸話集：訳注「常山紀談」』[正]卷 湯浅常山原著；大津雄一, 田口寛訳注
勉誠出版, 2010.2
- 『続群書類從』訂正 3 版 第 17 輯上 塙保己一原編；太田藤四郎補編 続群書類從完成会, 1958.7
- 『中世日記紀行集』福田秀一[ほか]校注 (新日本古典文学大系 51) 岩波書店 1990.10
- 『連歌入門』広木一人著 三弥井書店 2010.11
- 『連歌辞典』広木一人編 東京堂出版 2010.3
- 『文芸会席作法書集：和歌・連歌・俳諧』廣木一人, 松本麻子, 山本啓介編 風間書房 2008
- 『連歌と国語教育：座の文学の魅力とその可能性』黒岩淳著 溪水社 2012.9

連歌展：貴族から武士、そして民衆へ

2017年6月19日 発行

著 者—東海大学付属図書館

印 刷—東海大学教育支援センター・技術支援課

発行者—東海大学付属図書館

<https://library.time.u-tokai.ac.jp/>

〒259-1292 平塚市北金目四丁目 1 番 1 号

電話 0463-58-1211 (代)
